

Sino-Tibetan Relations in the Seventeenth Century

Zahiruddin Ahmad

Serie Orientale Roma XL,

Istituto Italiano per il Medio ed Est-

remo Oriente, Rome, 1970, 345 pp.

さきに私は、楊氏の譯註にかかるチベット文獻「青海史」を本誌に紹介した際に、明清鼎革の折に西北邊境に大きな變動があったが、その歴史的研究は甚だ困難に満ちており、充分な成果はあがっていないことを述べた(本誌第二九卷一號一一四頁)。即ちこの時期——十七世紀における西北邊境情勢の究明には漢・滿・蒙・藏の諸史料に通曉してこれを利用せねばならず、そのことが大きな負擔となつて隘路を形成しているということである。ところがここに紹介するアーマッド氏の著書はこのような負擔を跳ねのけ、主として漢藏の文獻によつてではあるが、この時代の研究のブランクをほぼ完全に埋めることに成功した。次に本書の特徴を述べよう。

第一は中國、チベットの公の記録 official documents によつて、それらが詳細に對照吟味され、事實の決定が適確に行われていることである。公の記録というのは、中國側では清朝の太宗、世祖、聖祖の諸實錄、チベット側では第三、四、五、六の歴代ダライラマの傳記であるが、それらは實によく丹念に調べられている。「公の記録のみによつた」とはアーマッド氏自らの言葉であるが、勿論その他の個人の著作も縦横に驅使されて、相當細かい史實についての研究が行きとどいている。例えばスンパケンボの青海史などはこの期の研究に缺くべからざる重要文獻であるが、それは楊氏とは無關

係に、氏自ら適確な譯を作つてそれを引用している。第二に、この時代の歴史的に重要な問題はすべて正面から取上げていることである。ホショト部長グシハンの青海進出、そのチベット征服、ダライ政權の成立、三藩の亂におけるチベット政府の動向、ジュンガルのガルダンの活動など、すべて漢藏の諸史料をよく利用し、これらの人物、事件の相互の關係を正確にトレースしている。特に漢藏の史料の係年はすべて西曆の年月日を記すことによつて精密に照合されている。第三に、以上のように細い點のみでなく、この期の政治的諸變動が漢藏關係へ如何に影響したかを巨視的に捉え、清朝の勢力が漸次着實に西北地帯へ擴がつてゆくことを明かにしたことである。本來、蒙古——特にハルハ——、ジュンガル、青海、チベットなどの乾燥地帯は最初は清朝とは大した關係なしに存在したのであり、寧ろ西北地帯は西北地帯で一つの宗教的、文化的まとまりを持ちつつあった。それに清朝は巧に個々の政治變動にコミットしてゆき、全體を支配するようになったのであるが、その政治的な變化の歴史を實によく氏は把握している。

以下に章を追うてその内容を紹介し、私なりの感想を記してゆく。

第一章「史料」は、中國、チベットなどの史料となる文獻の解題であるが、中國側では、資治通鑑綱目、聖武記、東華錄、清史稿、清朝實錄などがあげられ、チベット側では、第三、四、五、六各代のダライラマの傳記、初代パンチェンラマの傳記、第五代ダライの佛教史、ヴァイドリアセルボ、バクサムジョンサン、青海史、蒙古佛教史などがあげられるが、このうちで、第五代の傳記が如何なる過程で作られたのかを述べている點は從來全く知られなかったこと

で興味津々たるものがある。またヴァイドリアセルボの紹介も頗る有用の文字となっている。

第二章「土地と住民」では、チベットとそれに關聯する地域、住民の歴史地理的説明がある。即ち十七世紀初期のチベットの地域区分、またその中國との境界は、東南では麗江、東方では打箭爐、大金川、松潘であり、青海地方はアルタンハン以來モンゴル族の住地となったこと、そしてそれらはダライに忠誠を誓っていたから、清の軍隊が一六四五年に西寧に入ってから、その力は弱いものがあり、それを十の實例をあげて明かにする。ただモンゴル地域に關してハルハ、チャハル、ウリヤンハイが右翼で、オルドス、トメツト、ユンシエブウが左翼というのは(七三頁)左右が逆ではないであらうか。また西モンゴルのラマ教入信は十六世紀末、十七世紀初頭とするが(七九頁)、その根據はダライ佛教史の記事で、それにより更に一五九四—一六〇六年と限定される。しかしダライ佛教史の記事は少しく曖昧であり(九九頁)、やはりこれは若松氏が決定したアルトゥンハン時代から一六一六年までという考えの方が安定感がある(若松寛「カルムックにおけるラマ教受容の歴史的側面」本誌第二五卷一號)。

なおア氏はここでダライラマと東西モンゴルハンたちとの關係について重要な見方を提示する。即ち兩者は、

- (1) 崇敬の對象 Object of worship としてのダライと崇敬者 Worshipper としたのハン、
- (2) 後援の對象 Object of patronization としてのダライと後援者 Patron としたのハン、
- (3) 教敵からの保護の對象 Object of protection としてのダ

ライと保護者 Protector としたのハン、

の關係にあるという見方で、當然崇敬の對象としてのダライは崇敬者よりは優越した地位をもつ(七九頁)。この關係におけるハンの地位には後には清朝皇帝が入り込み、漸次その強大な政治力を以てハンたちを支配し、更にダライをも拘制してゆくというのである。この考え方は極めて示唆的であり、優れた歴史的理解の方法となしければならない。尤も既に鈴木氏は清帝とゲルグバとの關係について、それは僧、寺院と施主との關係で、法と財とを與えあう關係でもあり、少くとも兩者の初期の間柄はそのようなものであったと見ている(鈴木中正「チベットをめぐる中印關係史」、東京、昭和三七年、三三頁)。ア氏の見解はそれを一層廣いスケールで明確に證明したもののといふべきであらう。

第三章「チベットの再生」では、十六世紀後半にチベットにおいてバグモドゥバが衰頹し、それに代つてゲルグバがその勢力を確立してゆく、その豫兆として、第三代ダライとアルタンハンの會見並にその意味を検討する。ダライは二人の會見をバสบとフビライとの會に擬するが、そのような尤もらしい説明の裏には、やはり前章で説いた崇敬の對象 *Method gnas* と崇敬者(施主) *Yon bdag* の關係があり、その關係を東方の強力な支配者との間に確立したいのがダライの本心であったとする。續いてチベットの内亂を述べるが、所謂シンシャバのカルマブツォグナムギェル、カルマテンキョンワンポ父子の一六一〇年のウイ侵入、バグモドゥバの一層の弱體化、一六一八年のシンシャバのゲルグバへの壓迫、一六二〇年のシンシャバとモンゴルとの衝突(一六二六年におけるトバタイジ(オルドスハンのボシヨクトジノンの子)と第五代ダライとの間のチヨ

エネーとヨンダの關係の定立などが語られ、最後にグシハンの登場、ダライ政權の成立となる。この間の敘述は用意周到を極め、チベット側の利用すべき史料はすべて完全に利用されて、この章は本書中の白眉をなしている。ダライの政權獲得とともに當然論じられなければならないものに、バグモドゥバの終末（一三七頁）、ポタラ宮の造營（一四三頁）、第五代ダライと清朝との接觸（一五四頁）の問題があるが、これらも史料の適切な扱いによって明確に述べられている。

なお一六二一年におけるシンシャバとモンゴルとのキャンタンガンの戦鬪については、第五代ダライ傳、初代パンチェン傳を引いて事實を確定し、蒙古源流の混亂した記事を訂正している（一〇五頁）。またグシハンのチベット王になった日を、多くのチベット史料を検討して壬午の年三月十五日（一六四二年四月二三日）とする（一三四頁）。

第四章「順治朝」ではこの時代の最大の問題であつた第五代ダライの北京入覲問題が扱われる。このダライの入覲は決してスムーズに行われたものでなく、清朝では内部に種々の困難を抱えていた。それについては我々は、鈴木氏の中國文獻を利用しての詳しい記述を得ているが（鈴木前掲書一一頁以下）、ア氏は中國文獻のみならずチベット文獻をも駆使してその間の複雑な經緯を説明し、このダライの東行を政治的なものでなく、宣教的な色彩のものと結論する（一八三頁）。續いてバグモドゥバの最後が扱われるが、バグモドゥバの持つ政權——それは既に全くの虛位といつてもよいものであつた——が、如何なる経過をたどつてダライの手に移つたかは從來何人も明かにし得なかつたところである。ア氏は實録中の重要記

載に、第五代ダライ傳の記事を重ね合せ、それによつて見事にバグモドゥバの最後のデシが一六四二年頃にゲルグバに改宗させられたことを明かにした（一八八頁以下）。

第五章「吳三桂（一）」は、三藩の亂直前の現地に起つた清藏關係の主なものの三件を述べるが、一は一六六二年の青海のメルゲン族の出口事件で、この事件の後始末は、清朝がダライの好意によつて行わなければならなかつたこと、二は一六五九—七三年間には清藏の間に規則正しい使節の往來があり、ホショト首長の交代などはよく清廷に通報され、平和的關係が保たれていたこと、三に雲南とチベットとの間に茶馬貿易がスムーズに行われていたことなどで、いづれも次章の吳三桂とチベットとの交渉の豫備的知識を提供しているものである。

第六章「吳三桂（二）」では三藩の亂そのものは述べず、この亂の際に吳三桂が積極的に第五代ダライに働きかけ、ダライも或る程度彼と關係を保持したが、清朝側の強い態度でそれが制壓されてゆくプロセスを記す。ダライは康熙帝に、清朝側に誠意を盡すことを明言するが、帝は必ずしもそれを信じていなかった。また打箭爐はこのとき一時的に清兵が進駐し、以後中國領に編入されることになつた。

第七章「ガルダン（一）」アラシジャンエルート」。ここではジュンガルのガルダンの興起とアラシジャンエルートの成立が語られるが、ガルダンがもともとエンサ活佛 Dben sa spu'i sku と稱されたラマであり、チベットで修行し、のち還俗したこと、ホショトの正系オチルトハンとの抗争には第五代ダライが仲介に入つていたことなど目新しい記述が多い。

第八章「ガルダン（二）ハルハ」では、先ずハルハと清朝との關係を述べ、ハルハ三ハンは最初ダライによって認證せられ、その信任狀をもって清朝に貢していたとする。従つてガルダンとハルハの關係もダライを中に挟んでおり、ガルダンが東侵してハルハの大部分が清朝に頼ったときも、清朝はダライの存在を無視できなかった。清朝はダライを盛に利用したのであるが、結局實力をもってウランブドンにガルダンと決戦せざるを得なくなった。その事の經過は漢文獻によつて我々に知られているが、この紛争に關聯してダライが派遣したガルダンシレトウラマがガンデン寺の第四十四代座主であることをチベット史料によつて明かにした（二六五頁）。これなどはチベット文獻を精査したア氏にして初めてなし得る業績である。

第九章「ガルダン（三）ウランブドンからジョモドへ」。ここではウランブドンの大勝後の康熙帝のスケールの大きい善後策が扱われる。一六九一年に帝は内外モンゴルの諸侯をドロンノールに集めてその忠誠を誓わせたが、これによつてハルハの清朝への服従は決定的となった。一六九六年にはジョモドでガルダンと再度の決戦が行われ、ガルダンは自殺への道を歩んでいった。また直接關係はないが、一六九三年にはチベットのデバ、サンギギヤムツォがダライの請によつてチベット王に封ぜられている。

第十章「ガルダン（四）ガルダン搜索」。ここではガルダンの退路をすべて絶ち、その一族を捕えることへの康熙帝の執念、ガルダンの死體の搜索、第五代ダライの喪を長期間秘したサンギギヤムツォへの追求、第六代ダライ坐牀の實現などが記される。

第十一章「餘波」。ガルダン問題の後始末として康熙帝はツェフ

ンアラブダンに、ガルダン逃亡に手を貸したイラククサンホトクトの引渡しを求め、ホトクトを極刑に處した。一方青海ホシトの諸侯は一團となつて一六九八年到北京に入朝した。西南方面では打箭爐が全く清朝支配下で平和になり、清朝の勢力はニャロン方面まで浸透した。

第十二章「十八世紀への推移」。ここでは一七〇三年のラサンハンの登場、それに對する康熙帝のハン號の授與などに觸れる。ア氏は最後にいう。

我々は、蒙古においてダライの政治的權威が消滅しつつあったこと、アラシャンエルトが帝國の旗地制度に包括されたこと、清朝は青海に確固たる勢力を築いたこと、打箭爐は清帝國に併合されたこと、そして清朝の影はニャロンを透してチベットに及んだという一連の事實を以て、この十七世紀を離れよう。

以上、本書の内容を、多少私なりの感想を交えながら紹介した。スケールの大きい問題の取扱方、精確なドキュメンテーションの連續は感嘆を禁じ得ない。しかし細部の點には問題となるものが少なくないと思われるので、それを左に記そう。

（一）八四頁。清太宗の名を Abahai とするが、Hongtaiji の誤であらう。一五四頁も同様。

（二）八七頁。Si-hi-hi を西寧城とするが當っているであらう。但し Si-hi-hi は城を寫したのでなくて、州 zhou を訛つて寫したのではなからうか。宋、金、元三代の間、ここには西寧州が置かれていた（西寧府新志卷三、一丁裏、五丁表）。

（三）八八頁。Khongsim Bodhisatva (Schmidt Text: Gong-

sim bodhisatva) の Khongsim は觀世音 kuan si yin の訛った形であらう。勿論ア氏の説明するようへ Sryan ras gzigz そのものである。

(四) 同頁。「一五七八年に(第三代ダライ)ソナムギャムツォが蒙古に現れ、アルタンハンと會つた」とあるが、蒙古ではなくて青海である。蒙古源流、第三代ダライ傳ともにチャブチャル Cab-ciyar で會つたことをいうが、この地は青海(湖)の東南邊で、中國の地圖では恰不恰と書される所である。同様に一五二頁に、「一五七八年ダライがオルドスにいたとき萬曆帝の招待を受けた」とあるのも、年代を正しいとする限りオルドスではない。

(五) 一一〇頁。第五代ダライがトバタイジに贈つた稱號 Thahisun hui thahijia の前半を太宗の音譯とするが、理解できない。

(六) 一三八頁。レーパチェン(チツクデツェン)の在位を八一七—八三六年とするが、八一五—八四一年が正しい(佐藤長「ダ Lama 王の在位年次について」史林第四六卷五號、昭和三十八年)。

(七) 一五二、一五三頁。ともに萬曆とあるのは萬曆が正しい。

(八) 一五三頁。Kwa diñ tahi gu ci は灌頂大國師である。

(九) 一六〇頁。濟東胡土克圖を Skyid groñ qutuytu または Rje druñ qutuytu だとするが、多分後者が正しいであらう。

(一〇) 一七三頁。第五代ダライ傳に出てくる Khe cin ge chin dhoñ を和碩承澤親王に當てるのは正しいが、Khe cin ge を滿洲語 Gosinga (愛情深い、親切な)とするのは當らない。これは Kesinge (恩澤を受けた)として初めて「承澤」に一致する。

(一一) 一七七頁。Ka pa la a ma は世祖實錄順治十年夏四月丙申朔の條に出る「公噶布刺」と同一人であらう。a ma は氏のい

うようへ amban である。これとともに出づる As Khan a ma は Ashan i amban で、侍郎を意味するが、この場合特定の個人を當てることはできなかった。

(一二) 一八六頁。第五代ダライ傳により、一六五四年正月に、ダライがチャンロチェンのカブチュバを清廷に送り、それが世祖實錄順治十一年六月戊寅の、「厄魯特部落諸門汗」の表謝に相應するものとするが、これは別人であらう。ダライがこのような名で、清廷で呼ばれたことはない。多分このラマは青海に坐牀するチャガンノムンハン活佛 Gagan non-in gan qutuytu であらう。蒙古遊牧記卷一二の青海和碩部の最後には察罕諸門汗が青海二十九旗とともに盟を構成することを記している。

(一三) 一九六頁。一六六七年のメルゲン部落の國外逃亡について山西陝西總督盧崇峻の疏言が譯されているが、その中で、「且有逃番蠻敬、口稱」云々とあるのを、「内地へ逃げ込んだ若干の部人があり、彼等は恭しく我々に口頭で述べた」とするのは誤であらう。蠻敬は人名と見るべきである。

(一四) 二〇〇頁。Kan-tu taiji (千都台吉)は Qandu tayji < Mikhab hgo tayji であらう。一三六、二四五、一九三各頁の Han-tu taiji (罕都台吉)も同様である。

(一五) 二〇九頁。第五代ダライ傳に出てくる、東南チベットに活動したダライホンタイジとタシを、清史稿藩部五によって、達賴巴圖爾とその子達什車凌合吉に當てている。このうち合吉は台吉が正しく、清史稿の記載が誤っていると思われる。ア氏はダライホンタイジをグシハンの第六子ダライバトル(名はドルジ)とするのであるが、外藩蒙古回部王公表傳、西域同文志、蒙古遊牧記ともに、

ダライバートルの子にタシツェリンなる名を記していない。これは前掲清史稿の「多爾濟は(1)札薩克貝勒朋素克旺札勒、(2)達什車凌合吉、(3)伊什多勒札布三旗の祖である」とあるのを、ア氏は誤解したのであろう。遊牧記によれば(1)は西前旗、(2)は西後旗、(3)は北左末旗の各旗長でいずれもダライバートルの曾孫である。とするとダライバートルはその曾孫のタシツェリンとともに作戦活動したことになるが、それは如何にしても無理である。従ってダライホンタイジをダライバートルにとる限り、このタシはタシツェリンではあるまい。

(一六) 二三四頁。ジュンガルのガルダンとオチルトハンとの戦について、聖祖實錄康熙十七年(一六七八)八月庚午の條の情報に、「ガルダンが今年二月にオチルトハンを殺した」とあるのにより、一六七七—七八年にオチルトは殺されたと決定する。しかしこれは原文の讀み違えて、實はオチルトハンの屬下からの情報として「噶爾丹は既に鄂齊爾圖汗を殺した。今年二月内に、噶爾丹はその屬下の兵に物資を準備させてその地から起兵したが、何處に行ったかは分らない」とあるだけである。二月というのは後文にかかる言葉で、前文にかかるものではない。従ってオチルトは二月に殺されたのではなくて、より以前ということになる。勿論ア氏は實錄康熙十六年五月甲午の條の、「噶爾丹が鄂齊爾圖汗と戦い、その陣獲の弓矢などを帝に献上した」ことをあげている。しかし氏はこのときは第一回の戦で、更に續いて同書康熙十六年十月甲寅の條の「鄂齊爾圖汗とハルハの土謝圖汗が噶爾丹を夾攻した」という情報に基き第二回の戦が行われたとし、續いて翌年二月にオチルトは死んだとするのである。にも拘らず實錄の同じ甲寅の條には、甘肅提督張勇らの言として「厄魯特の濟農が塞邊に至り救済を求めたが、濟農ら

は『我々は皆鄂齊爾圖汗の子姪で、窮して歸する所なくここに至った。聞くところによれば、噶爾丹は兵を遣うして已まない』といったことを傳えている。オチルトの子姪たちが歸する所なしとして邊塞に逃れてきているところを見ると、このとき既に勝敗は決し、オチルトは敵手に落ちていたのであろう。即ち遅くとも一七七七年(康熙十六年)五月には決戦は終つていたとしなければならぬ。それではこれを更にどこまで遡り得るかという問題になるが、これは羽田氏がパラス、バドレーにより、兩ハンの決戦は一六七六年(康熙十五年)に行われ、オチルトは殺されたとしていることを注意したい(羽田明「ガルダン傳考證」東方學會創立十五周年記念東方學論集、昭和三十七年、二二〇頁)。私は羽田氏の指摘がほぼ正しいと思うのであるが、これに關聯して、ア氏自身が引いている新しい史料を紹介しよう。即ちヴァイドリアセルポの中に、ツルチムダルギェ(ガンデン寺第四十五代座主)の事蹟を述べて(二三三頁)、丙辰の年(一六七六)に第五代ダライの命により、(オチルト)セチェンハンとガルダンホンタイジの間を調整するためにオイラートに行った……セチェンハンは打敗られ、ホンタイジの勢力は絶頂に達した。

とあり、事件が一六七六年に起こり、この年に結末を見たことを明かにしているのである。

(一七) 二六五頁。噶爾丹西勒圖をチベット史料により、ガンデン寺第四十四代座主ロトエギヤムツォに比定したのは當つている。この漢名は蒙古語 *Galdan siregetu* の音譯で、チベット語 *Dga' rlan khri pa* の音意譯と考えられる。

(一八) 同頁。ハルハのメルゲンタイジがアブホの系統であるこ

とが、註三九で詳しく述べられるが誤っていない。メルゲンタイジ(墨爾根台吉)の本名は伊達木ハDanハYi danでアブホの玄孫に當る(遊牧記卷八、賽音諾顏部中右翼末旗。王公表傳卷六九、一丁表。同卷七五、六丁表)。

(一九)二七三頁。ダライタイジについて註六四で、シルイチュエチエンハンの第七子 Baocadaochi Daii Chun-tai-dshi と第九子の Ananda Daii Deshinong の子からかであるとするが、恐らく後者が正しい。遊牧記卷九、車臣汗部中前旗の條に碩壘汗の子に阿南達があり、達實台吉と稱されたことが出ているからである。なお前者は遊牧記卷九、車臣汗部右翼中旗の條に碩壘の第八子巴特瑪達什、稱號達實輝台吉と出てくるものである。この人物の名は右のローマ字名と一致しないが、恐らくローマ字名(ア氏はシュミットによる)の方が誤である。遊牧記の詳しい参照が望まれる點である。

(二〇)二八〇頁。齊勞圖河は清十三排圖、七排西二において、ウリヤスタイの東方にある齊老圖必拉 Qilaytu bira であらう。

(二一)同頁。トドエルデニは遊牧記卷八では賽音諾顏部右翼右後旗の祖である。同じくゴンボクンドウレンボシヨクトは同部中左旗の祖である。

(二二)二八一頁。烏爾會河は、十三排圖、七排東一でハルハ河の南にある烏爾揮必拉であらう。

(二三)二九三頁。E lin chen は ErincinハRin chen である。

(二四)二九八頁。シプトイハタンバトルは遊牧記卷七では、土謝圖汗部右翼左末旗の錫布推哈坦巴圖魯、ナムジャルトインは同じく遊牧記卷九の車臣汗部左翼中旗の納木札勒、稱號額爾德尼台吉である。

(二五)二九九頁。費揚古は Fiyangu。昭莫多是 Jayu modo (林、森)である。特勒爾濟は十三排圖、七排西一によれば、ケルレン河の支流に特勒爾集必拉があるから、この近傍にあったのであらう。

(二六)三〇一頁。註一に羅壘エムチがあるが、羅壘は Loruハ Bio gros であらう。三二〇頁のそれも同様。

(二七)三〇一頁。布木は BunハHbun であらう。

(二八)三〇三頁。察罕托羅 lake は原文の察罕托羅海の誤譯である。ア氏は海字をそのまま湖の意にとってしまったが、この察罕托羅海は Cayan toloyai で、十三排圖、九排西二によれば青海の東南岸にある小湖である。

(二九)三一七頁または一四九頁に出る薩克薩特呼里克は、十三排圖、八排西二によれば、ハミの東北東にある薩克薩圖古里克であらう。トゴリグ tojurin は迂回路の意である。

(三〇)三二〇頁。ボシヨクトジノンの族子エルデニタイジというのは、遊牧記卷二によれば、グシハンの子オンボの孫那木札勒であり、南左翼末旗のジャサクで、稱號は額爾德尼であった。ボシヨクトジノンはグシハンの第五子イルドゥチの子であるから、輩行からすれば、エルデニは確に族子である。

(三一)同頁。Tu-su-ka-erh (杜思喀爾)は DusyarハGdugs dkar' A-la-pu-tan は ArabdanハRab bran である。

(三二)三二二頁。ア氏は垂藏を Chos ishan かと疑うが、Chos bzah であらう。寺名の溫都孫は UndusunハRgyudハTantira である。

(三三)三二五頁。盆楚克(または盆素克)は Putsuk (また

は Pinstuk < Phun tshogs と疑う必要はない。

(三四) 三一九頁。青海の A-chi kun-pu Baatur (阿奇浪布巴圖爾) は前左翼頭旗の祖となったエルデニエルケトクトネーの父で、グシハンの第三子ダランタイの子。遊牧記卷一二によれば衰布が名で、阿齊巴圖爾が稱號である。ただ同文志卷一七によれば伊齊巴圖爾古木布とあり、伊齊に對應する蒙古綴は「齊」チベット綴は「齊」である。

(三五) 同頁。ダライダイチンは、遊牧記卷一二によれば、グシハンの第六子ドルジの子で西前旗の祖となった策旺阿喇布坦で、その稱號は達賴戴青である。

(三六) 同頁。エルケバートルは、原文の實錄康熙四十五年七月癸酉の條には、「青海多羅郡王額爾克巴爾都爾故」とあるが、巴爾都爾は巴爾珠爾の誤であらう。遊牧記卷一二西前旗の條に、康熙四十五年に額爾克巴爾珠爾が死んだことが書かれており、實錄の記載と一致する。とすると前項(三五)のダライダイチンの子であり、エルケバートルではなくてエルケバルジョル Erke baljor < Erke dgal

byor が正しい。

以上、細部にわたって、誤と思われるもの、不充分と思われるものを列挙したが、これによって感ぜられることはア氏が滿洲語、蒙古語の知識において未だしの感があることである。もしこれらの言語の知識が充分であり、巧にそれらが利用されたならば、本書はより精密な内容となり得たであらう。本書では地名、人名の比定が、その他にも多く行われており成功しているものが決して少くない。右はそのうちの一部の難點をあげたに過ぎない。またア氏は漢文にも熟達しているらしいから、皇朝藩部要略、王公表傳、同文志、遊牧記などもこの際充分に利用してほしかった。全體を概観するに、ア氏はチベット學者としての基礎的素養は相當をなえているようである。私は氏の經歷を全く知らないのであるが、新進氣鋭の士と思われるにも拘らず、この困難な分野に進出して優秀な業績を収めたことを祝福したい。氏の勞を多とするとともに、チベット學界に大きな貢獻がなされたことを學界のために心から慶ぶものである。

(佐藤 長)